

ワイトゲンシュタインにおける規準概念の形成過程

——「文法と事実の区別」に寄せて——

羽 地 亮

はじめに

ワイトゲンシュタインの「規準」(Kriterium, criterion)という概念は、それが『青色本』で術語的な仕方、「徴候」(Symptom, symptom)の概念との対比とともに導入されて以来(BB pp.24-25)⁽¹⁾、ワイトゲンシュタイン哲学の最も重要な概念のひとつとして、多くの議論を巻き起こしてきた⁽²⁾。ワイトゲンシュタインの解釈者たちは、彼が多くの著作でこの概念をあまり整合的でない仕方を用いていることを認めつつ、なんとかこの概念に明確な規定と説明を与えようと試みてきた。しかしながら、彼らの規定や説明は、いまだ正確な一致をみておらず、またそれらのいずれも成功を取めているようには思われない。このような現状に鑑みて、小論では、まず規準概念の困って来るところを通時的観点から明らかにする。そして次に規準の多様性から、その概念の従来の規定や説明が不正確であることを示し、そして従来とは異なる観点からその概念のある特質を指摘できることを示唆する。続いて最後に、彼の哲学の普く認知されている前提——文法と事実を峻別したうえで、前者を哲学的探究の目標に据えるという前提(cf. PU §§90, 371, 373, BGM p.88, Z §§458, 459)——の言わんとするところをより明確なものにすることを試みたい。

I ウイトゲンシュタインの検証主義

前期ワイトゲンシュタインの『論理哲学論考』(TLP, 1918年脱稿)は、真理関数論と言語画像説の二本柱で支えられた建物であった。1929年に哲学に復帰してから、彼は色排除問題 colour-exclusion problem の考察などによって真理関数論を放棄する。だが、この辺の委細は小論には直接関係してこない。問題となるのは言語画像説の方である。彼は、命題は現実を写す画像であり、命題は現実と内的関係をもつ、という考えをかなり後ま

で保持し続けた。ただし、前期においては、言語で有意味に何ごとかを語り得るためには世界はかくあらねばならぬ、というアプリアリな主張がなされたのに対して、中期においては、常に具体的経験に問いかねながら、現実の論理構造の明晰な像を与える構文論の規則が探られていく。例えば(WWK p.64)、ある人が身長2メートルであることから彼が3メートルではないと推論できるということは、すべての推論はトートロジーであるという前期の教条的な考え方からは説明できない。このような具体的な反省に基づいて方針の転換が図られたのである。

そして、こうした方針の変化が言語画像説にもたらしたものは、第一に検証主義の言語観であり、第二に命題と仮説の区別の導入であった。すなわち、現実を写す画像としての命題の意味を知っているとは、命題がいかなる場合に真であるか知っているということである(TLP 4.024, 4.063)。そしてそれは命題の真(偽)を決定する仕方を知っていることに等しい(PB §43)。このことは「命題の意味とはそれを検証する仕方である」(検証原理)と定式化される(PB §166, WWK pp.227,244, LWL p.66)。これが検証主義の言語観であり³⁾、そしてこのような見解は、言語は現実の画像であるという抽象的な主張が、それでは言語の意味はいかにして知られるのかという、より具体的な問題の場に持ち込まれた末の産物なのである。

続いて、命題を検証する仕方に違いがあることが見てとられ、(狭義の、あるいは、純粹な)命題と仮説の区別が導入される。命題とは、直接に与えられたものの記述(WWK p.97)、感覚与件についての判断(LWL p.66)、現象学的言明(WWK p.101)であり、例えば「これは赤い」「痛みがある」のような表現である。命題は直接的経験によって一通りの仕方で検証され、いったん検証されたらさらなる検証の必要がなく、その意味で命題はアプリアリである(LWL p.66)。「アプリアリ」といわれるのは、命題とそれの検証との結び付きは(一見そう思われるように)経験的なものであるわけではなく、内的なものだからであろう。すなわち上述のいわゆる検証原理の定式化は、ある命題がその検証命題から帰結するということを定めた「文法の規則」なのである(cf. WWK p.186)。一方、仮説とは、命題を形成するための法則(PB §228, WWK p.99, LWL p.110)であり、命題はこの法則の例証である(Ibid)。われわれは複雑な構成物である仮説の個々の「断面」(命題)を観察するだけである(PB §§225,228, WWK pp.100,159)。仮説は例えば「この男は病気だ」「太陽は明日昇るだろう」「これは椅子だ」のような、物理的対象や未来の予測や他者の経験などに関する表現である(LWL p.66)。それは直接的経験とは関わらず、した

がって検証されず、確証されるに過ぎない。命題が真か偽であるのに対して、仮説はあくまで蓋然的である(PB §§226,228, WWK p.100)。要するに、命題は直接的な仕方の意味をもつに対して、仮説は間接的な仕方の意味をもつのである(PB §56)。

ここで一つの注釈を付け加えておきたい。それは命題と仮説が厳格に峻別されているわけではないということである。「仮説は、命題において表現される、検証ないし反証可能な期待を構成する、と言って構わない。同じ言葉が私にとっては命題を表現し、君にとっては仮説を表現することができる」(LWL p.110)。期待の表現があらかじめ命題か仮説かに決まっているわけではない。それを私が発言するとき「期待の直接的経験」による検証がそれを命題にし、それを他者が発言するとき私はそれを検証できないので同じ発言が今度は仮説になる。期待の表現はそれを取りまく状況次第でステータスを変えるのである。また、別のテキストでは(WWK p.97)「これは黄色い」という表現も、状況によってステータスを変えることが指摘されている。すなわち、この表現は、例えばある化学反応が検証の手段となっている場合には仮説となり、私に見えるものが検証として有効となっている場合には命題となるのである。ウイトゲンシュタインが現実に対してあてがう「ものさし」(WWK p.63, cf.TLP 2.1512)は、かなり融通のきく伸縮自在の道具なのである。

II 現象と徴候

ところで、命題と仮説の区別ということを導いた、検証の仕方の違い——検証の際に利用される事象の側の差異をもう少し明確にしておく必要がある。そしてそれに伴いウイトゲンシュタインの命題の概念のさらなる明晰化とその哲学的な射程が明らかになるであろう。

検証の際に利用される事象については、ウイトゲンシュタインははっきりと次のように規定している。

「現象 *Phänomen* は、何か他のものの徴候 *Symptom*ではなく、実在である。

現象は、命題の真偽をそれが初めて決めるような何か他のものの徴候ではなく、現象自身が命題を検証するのである」(PB §225)。

「現象」と「徴候」の区別は、われわれの目標である「規準」と「徴候」の区別に繋がるものである。このテキストは他の不明瞭なテキストを理解するための要石となる。ウイトゲンシュタインはこんな例を出す(WWK pp.158-159)。——隣の部屋からピアノの演奏

が聞こえる。私は「兄が隣にいる」と言う。さて私がなぜそれを知っているのかと問われれば、こう答えることができよう。「彼は私に、この時間には隣の部屋にいたろう、と言っていた」。あるいは「私はピアノの演奏を聞き、それが彼の弾き方だと分かった」。あるいは「私は少し前に足音を聞いたが、それは彼の足音にそっくりだった」等々。さて私は同一の命題を異なる仕方で検証したように見える。しかしそうではない。私が検証したのは、何か他のものに対する様々な「徴候」である。ピアノの演奏、足音、等々は、兄の存在に対する徴候である——ウイトゲンシュタインによれば、「私」は「兄が隣にいる」という命題を異なる仕方で検証したわけではない。命題はただ一通りの直接的経験によって検証される。「兄が隣にいる」は命題ではなく仮説である。したがってそれはピアノの演奏や足音などの異なる徴候によって間接的にのみ検証されるのである。

われわれは先に命題とその検証との関係は経験的ではなく、内的であり文法規則であることを考察した。したがって、命題とそれを検証する現象との関係も同じことになる。一方、仮説と徴候との関係は、上の「ピアノを弾く兄」の例で見られるとおり、帰納的、経験的である⁽⁴⁾。しかしながら、現象と徴候とが厳格に峻別されているわけではないことは、銘記されなければならない。確かに「兄が隣にいる」という仮説に対してはピアノの音は徴候に過ぎない。しかし仮説の個々の「断面」、すなわち「音がする」という命題に対しては、その音は立派な現象なのである。逆に、ある命題を検証する現象が、他の仮説に対しては、徴候にしか過ぎないという事態も容易に見とられるだろう。現象と徴候との関係は、状況に応じて互いに入れ代わる相対的なものとして考えられるべきである。

以上のことを踏まえうえて、われわれはウイトゲンシュタインの関心が、仮説と徴候にではなく、命題とそれを検証する現象に向けられていることを理解する必要がある。命題は直接的所与の記述であり、現象学的言明と呼ばれたのであった。そして現象学的言語 *phänomenologische Sprache*⁽⁵⁾ とは、『哲学的考察』(PB)の時期(1930年頃)の彼にとって考察の眼差しの焦点にあったものである。この言語は、彼によれば(PB §1) ①直接的経験を直接的に描出し、②言語による描出の際の(あるいは経験の中の)本質的なものと本質的でないもの(言語の中の「空転する歯車」)とを認識し、③現象の可能性——文法を明らかにする、このような任務を担った言語である。この三つの課題の連関については、次のようであろう。現象学的言語は、直接的経験を描出するが(背景には勿論言語画像説

がある)、両者は内的関係にあり、その繋がりには文法規則である(だからこそこの言語は経験を「直接的に描出する」のである)。したがってこの言語は、文法——現象の可能性——言語と経験における本質に関わっている。例えば「私は痛い I have an ache.」は、「痛みがある There is an ache.」(現象学的言語)で置き換えられることが指摘されるとき、心的現象における自我の想定は「空転する歯車」であることが分かる(PB §§63, 65, AWL pp.21-22)。また、「これは白い」と「これは黒い」という現象学的言語は、視野の同じ場所を同時に描出することはできないという文法的特質をもっている。それゆえ、このことは「異なる色は同時に視野の同じ場所にあることができない」(この不可能性は論理的不可能性であって、物理的不可能性と混同されてはならない)という文法規則として定式化される(LWL pp.97-98)。以上のような、経験が規範的にはたらく場面をとらえてこれに展望のきく叙述を与える試みが、中期ウイトゲンシュタインの「現象学」なのである⁶⁾。

III 志向的体験の分析

以上のように、言語画像説の具体的経験に即した徹底化は検証主義へと導かれ、命題と仮説、現象と徴候の区別から独特の「現象学」へと結実した。ところがこれとほとんど同時進行的に、最終的に言語画像説や検証主義を根底から瓦解させることになる考察が始められていた。それが、意志、予想、願望、期待、欲求といった志向的体験の分析である。これはもとよりローカルな議論ではない。検証主義が、言語が現実と照らし合わされるその仕方に照明を当てた結果、ウイトゲンシュタインは、そもそも言語が現実と合致するよう志向(意図)されているのでなければ、検証は不可能であるという考えに至ったのである。すなわち「言語から志向という要素が除かれるなら、それによって言語の全機能が崩壊するだろう」(PB §20)というのである。

まず『哲学的考察』における分析を見よう。ウイトゲンシュタインは、例えばpという期待とpが生起することとは、いわばある物体の空洞の形とそれが満たされた形とに対応しているという(PB §34)。pは物体の体積の形態に対応し、この形態が与えられる仕方の違いが期待と生起との違いに対応する(Ibid)。「期待は出来事のモデルをこしらえる」(Ibid, cf.TLP 2.12)という記述からみても、ここには言語画像説を越える思想はない。期待の方には実在性が欠けていて(「空洞」で)、他方、出来事(生起)の方は実在性で満たされている。言語(思考)と現実という対比は崩れていない。

しかし突破口は言語画像説の中にすでに用意されていた。すなわち命題と現実との内的関係の主張の徹底化において新しい展開が示唆されるのである。ワイトゲンシュタインによれば、期待の実現ということの本質は、「期待が実現されること」という記述以外の第三のことがらに存するのではない。すなわち期待の実現にとって、期待(思考)と実現(現実)以外の、満足感や喜びの気持ちといった第三項は無関係なのである(PB §25)。

「pの期待を充足する事態は命題pによって描出される。それゆえ全く別の出来事の記述によって描出されるわけではない」(Ibid)。「第三項」は無関係である、ということによって、ワイトゲンシュタインはラッセルの、欲求と実現との関係を外的関係とみる見解を批判している(cf.PB §§21,22, LWL p.9)⁽⁷⁾。もしラッセルの見解が正しいなら、私がリンゴが食べたいと思っているときにおなかを殴られて食欲がなくなったとすれば、私が望んでいたのは殴られることだったということになる、というわけである(PB §22)。これに対して、ワイトゲンシュタインは期待や欲求とその実現との関係は内的関係であると主張する。「リンゴを食べる」ことの欲求はまさに「リンゴを食べる」ことの実現によって充足されるのであって、両者は必然的に、それ以外ないという仕方、結び付いているのである。彼独特の言い方によれば、「期待と期待されたこととは同じ空間の中になければならない」(PB §28)。次のステップは、期待と実現とは類似しているが(だからこそそれらを描出するために同じ表現を使う)(LWL pp.32-33)、言語と現実が別個のものであるように、期待と実現もやはり別個のものである、というかねてからのつきまとい続けるオブセッションを取り払うことである。

『哲学的文法』(PG, 1934年頃脱稿)第一部は、ブレイクスルーをもたらしした画期的な論考である。ワイトゲンシュタインは、ここではじめて、命題や思考と実在との調和とはいかなるものかという認識論的問題の成立根拠に疑問符を打ち込んだ。

例えば(cf.PG §§92,94)「彼はN氏が来るのを待っている(期待している)」という期待を期待たらしめているものは何か。それは彼の身振り、振る舞いだらうか。——部屋の中を行きつ戻りつする。時計を見上げる。タバコを吸う彼のために葉巻をそろえておく。外の物音に耳をすます——確かにこれらはN氏の来訪の期待の振る舞いであり得るが、期待以外のことがらについての振る舞いとも解釈できる。(「机がもう十センチ高くあってほしい」という願望の振る舞いとして、机の上十センチのところの手をもっていくとする。しかし、単に「机がもっと高くあってほしい」という願望の場合でも、同じ振る舞いがなされたかもしれない(PG §103)。振る舞いだけで志向の内容が弁別できるとは限

らない。) いま挙げられた様々な振る舞いは、期待の徴候、期待の帰納的証拠に過ぎないのである(PG §92)。

それでは、期待の本質は精神のはたらき——像や表象や観念や思考——にある、という考えはどうか。これもおかしい(PG ch. VII)。「N氏が来るのを待っている」という期待とは、N氏がやって来る像が心の中に浮かぶことだとしよう。しかしこの像は、期待ではなく単なる「彼が来る」という記述と対応してどこがいけないのか。あるいは「彼に来てほしくない」という表現と対応してどこがいけないのか。たとえ心的プロセスが存在したとしても、それだけでは適用や解釈の仕方が分からないので志向の種類や内容を判別できないのである。

ウィトゲンシュタインの解答はこうである。「願望の行為として、願望を言い表すことを考えてみると、問題は解決するように思われる」(PG §101)。「pが起こることの期待とは、期待しているその人が「私はpが起こることを期待している」と言うことにあ

る」(PG §92)。

言語と現実、期待と実現はそれぞれ別々のものではない。両者の対比は言語の内部ではじめて成り立つ。これはかねてよりの両者の内的関係の主張を徹底化した末の結論である。期待を期待たらしめているものは、振る舞いでも精神作用でもなく「私は・・・を期待する」という言語表現である。そして表現こそ期待の「規準」である。なるほどある場合には言語表現よりも振る舞いの方が規準となることもあり得るだろう。しかしそのときでもその振る舞いが言語によって媒介されていることは疑えない。非常に多くの場合、われわれの内外の諸現象は言語によって媒介されている。したがって、思考と実在との調和の問題は、実はある命題と別の命題との調和の問題なのである。思考と実在との合致とは、両者が同じ命題で記述されるということである。これは言語の自己完結性、自律性の主張である。「言語の中ですべてのことはけりがつく」(PG §95)。そして「思考と現実との調和は言語の文法の中に見いだされなければならない」(PG §112)。してみれば正確には、言語は単なる媒体ではなく、われわれの内外の諸現象を構成しているといえよう。

さて以上のように導かれた言語の自律性の主張は、ある意味で破壊的である。言語はもはや言語以外のいかなる事象にも根拠づけられない。したがって、志向が言語の全機能を支えているという主張も、直接的経験(現象)によって純粋な命題が検証されるという主張も(それゆえ検証主義も)、命題と仮説の区別も、現象と徴候の区別も、現象学的

言語も「現象学」も、言語画像説も、『哲学的考察』の時期までのすべてのウイトゲンシュタインの議論が、崩壊するかなり限定された範囲でしか成り立たなくなる。

ところが、この結論から新たに得られる成果は、失われたものを補って余りある。あらゆる事象が言語的なものとみなされる結果として、われわれの考察(勿論言語による)が妥当なものであればあるほど、説明と説明されるものが区別できなくなる(つまり両者が同一の命題に近づいていく)。両者はお互いの中に組み込まれていく。そうすると、われわれはある概念を説明しようとするとき、その説明には終点がないだろう。説明はそのまま説明されるものなのだから、いくらでも説明を続けていくことができよう。われわれは概念に鋭い境界線を引くことができず、われわれの反省は決して終わらないだろう。われわれは概念を定義したりその本質を述べたりすることができないだろう。これが家族的類似性(Familienähnlichkeit, family resemblance. cf. PG §35, BB pp.17-18,20-21, 32-33,86-87, PU §§65-88.)ということが生じるメカニズムである。ある種の科学上の概念や法律上の概念などは別として、われわれの日常の多くの概念が家族的類似性概念である。一例として『青色本』の「期待」の分析を参考にしよう。AはBが来るのを待つ(期待する)。これは様々なことであり得る。Aは手帳を見て今日の日付のところにBの名を見る。二人分のお茶を用意する。Bのためにタバコを出しておく。Bが部屋に入って来る姿を想像する。「Bが早く来ないかなあ」と言う。これらはすべて「Bの来訪の期待」と言い得る。これらには互いに重なり合い交差し合う多くの共通の特性があるが、これらすべてに共通な一つの特性はない。そして「Bの来訪の期待」の説明はこれで終わりではない。他の説明を後から後から付け加えていくことができよう。

しかしながら、それならどのような説明でもいいのかというと、そうではない。われわれは「Bの来訪の期待」に包摂される説明と包摂されない説明とをほとんど直観的に区別する。これはなぜか。何らかの、区別のための規準がはたらいっているからに違いない。ここにわれわれは以前の現象と徴候の概念に取って代わる、規準と徴候の概念を導入する必要がある。ところで先の『哲学的文法』における期待の分析では、「・・・を期待する」という言語表現が期待の規準であった。しかしあの場面での眼目は、無媒介的、無条件的な行為や思考といった事象はなく、あらゆる事象が言語による媒介、条件づけを前提としていることを示す点にあった。よって、あの場面でも示唆しておいたように、期待の規準はかくかくの言語表現のみであると考えする必要はないし、またそう考えるのは不自然である。したがって規準とは言語的(諸)現象——振る舞いや心的プロセ

スさえも含む——が状況に応じて規範的、文法的にはたらいいたものであると差し当たり言えるだろう。一方、徴候とは経験的帰納的証拠である。しかし規準と徴候は厳格に固定されたものではなく、(期待のような)同じ概念においてすら状況によって変化する相対的なものである。なぜなら、規準と徴候は、もしこのようであれば、多くの家族的類似性概念に適用できないであろうからである。

以上のように言語の自律性の確立からは、後期ウイトゲンシュタインの多くの基本概念が一連なりになって導出されるように思われる。家族的類似性、規準と徴候、言語ゲーム、生活形式、等々。しかし小論では規準概念に焦点を絞って、以下、その概念の特徴を明らかにし、若干の考察を付け加えたい。

IV 規準概念の特徴

まず、以下の規準概念を記述してみよう。

- 1 数学的概念の規準——演算(e. g. $4 + 1$)の結果(5)は、演算が実施されたことの規準である(BGM p.319)。また、三辺をもつことは、平面図形が三角形であることの規準である(LFM p.164)。
- 2 心理学的概念の規準——頬をおさえることは、歯が痛いことの規準である(BB p.24)。また、期待の言語表現は、期待の規準である(PG §92)。
- 3 その他の規準

①私の指が私の眼に触れていることの規準は、自分で自分の眼に触れていると言わせるような特定の感じがしたということである(BB p.51)。

②アンギーナ(咽喉炎)にかかっていることの規準は、血液中存在する細菌が見つかることである(BB pp.24-25)。

これらの規準に解釈者たちの様々な説明を当てはめてみよう。1の規準は、阻却可能 *defeasible* でなく、当の数学的概念と内的関係を構成する。それは定義を与えており、おそらく証拠とはいえない。たとえ状況依存的だとしてもその状況はすべて記述できる。次に2の規準に移ると、それは阻却可能であり、当の心理学的概念と内的関係にあるか否かは微妙である(この規準と概念とは互いに独立だが何らかの文法的関係にある)。それは定義ではなく、ある意味で証拠である(だが徴候と同じではない)。しかし必ずしも確実な知識を与えるわけではない。また状況依存的でありかつ状況全体の記述は不可能である。3の①に移ると、それは阻却不可能で、当の概念と内的関係にある。しかしそ

それは証拠でありしかも定義である。それは状況に依存しない。3の②。それは科学上の定義の変動により阻却可能で、しかも当の概念と内的関係にある。それは定義を与えており証拠ではない。また状況依存的でありかつ状況全体の記述は不可能である。

ワイトゲンシュタインの規準概念は、言語ゲームの多様性に応じて、様々な仕方で行われている。すべての規準概念に共通する説明や規定を見いだすことはできない。なるほど規準は文法に関わっているのだから、それは言葉の意味(の一部)を決めると言えるかもしれない。しかし規準が変わっても必ずしもすべての場合に「その概念の意味が変わった」と言えるわけではない。われわれは厳格な規則に従って言葉を使っているわけではないのである(BB p.25)。規準概念の多様性は、この概念が様々な家族的類似性概念に適用可能であることの証しである。そうするとおそらく規準は、その説明はできないがしかし含蓄的に知られているというかたちで、ある概念の当てはまる状況を統制していることになろうが、この点を詳細に展開する紙数はすでに尽きている。他日を期したい。

終わりに

さて、以上のわれわれの考察がもし正しいなら、ワイトゲンシュタイン哲学の前提として広く受け入れられていることがら——文法(概念)と事実との区別ということの実質が些かなりとも明らかになるだろう。彼は次のように言う。「本質は文法の中で表現される」(PU §371)。彼の哲学的探究とは、現象に向けられた経験的考察ではなく、現象の可能性に向けられた文法的考察である(PU §90)。そして「哲学的探究、概念的探究。形而上学の本質、それは事実的探究と概念的探究との区別を抹消すること」というように、区別されるべき双方の探究の混同が戒められる(Z §458, cf. AWL p.18)。ところで、これまでわれわれは、命題と仮説との区別、現象と徴候との区別、そして規準と徴候との区別が、絶対的なものではなく、状況に応じて、区別された両者が入れ代わるという相対性をもっていることを見てきた。ワイトゲンシュタインは常に、事実が規範的にはたらき、文法が経験命題と化する現場を見据えてきたのではなかったか。そのうえで彼は言語的現象の文法的規範的側面を探究の目標に据えたのではないだろうか。すなわち「事実的探究と概念的探究との区別」は、あくまで方法的なものなのである。したがって、文法と事実とは必ずしも常に鮮明に区別されるわけではないとしても、それはしかしこの区別を否定することにはならない(Z §466)。この区別が否定されて、言語が規範と事実の

二つの契機のアマルガムとみなされるとき、不断に形而上学が生み出され続けることであろう。

《注》

(1) ウィトゲンシュタインの著作等への言及は次の略号による。

B B—*The Blue and Brown Books*(Blackwell,1958)

T L P—*Tractatus Logico-Philosophicus* (Routledge & Kegan Paul,1961)

W W K—*Ludwig Wittgenstein und der Wiener Kreis*(Suhrkamp,1967)

P B—*Philosophische Bemerkungen*(Suhrkamp,1989)

L W L—*Wittgenstein's Lectures, Cambridge, 1930-1932,*

From the Notes of John King and Desmond Lee, ed. Desmond Lee

(Blackwell,1980)

A W L—*Wittgenstein's Lectures, Cambridge, 1932-1935,*

From the Notes of Alice Ambrose and Margaret Macdonald, ed. Alice Ambrose(Blackwell,1979)

M—“Wittgenstein's Lectures in 1930-33”, in G.E.Moore, *Philosophical Papers*

(Allen and Unwin,1959)

P G—*Philosophische Grammatik*(Suhrkamp,1989)

(小論では Teil I のみに言及)

P U—*Philosophische Untersuchungen*(Blackwell,1953)

B G M—*Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik* (Suhrkamp,1974)

L F M—*Wittgenstein's Lectures on the Foundations of Mathematics, Cambridge, 1939,*

From the Notes of R.G.Bosanquet, N.Malcolm, R.Rhees, and Y.Smythies, ed.

C.Diamond(The University of Chicago Press,1976)

Z—*Zettel*, hg. von G.E.M.Ancombe und G.H.von Wright(Blackwell,1967)

(2) 規準概念に関する主な論文は、John V.Canfield ed., *The Philosophy of Wittgenstein Vol.7, Criteria*(Garland Publishing,1986)に収録されている。

(3) こうした検証主義言語観に基づいて、論理実証主義者は有意意味な命題(科学の命題)と無意味な命題(形而上学の命題)とを峻別した。これに対してウィトゲンシュタインは、自分は意味とは何かという問題には関与しておらず、ある命題がその検証命題から帰結するという「文法の規則」を立てているだけだと主張する

(WWK p.186)。両者の違いについては議論すべき多くのことがあるが、ここではその紙幅がない。

- (4) ハッカーは、仮説を証拠だてる純粋な命題が徴候であり、徴候と仮説との関係は文法的であって、経験的ではない、と解釈し、一方、現象については何も触れていない。

(cf.P.M.S. Hacker ,*Wittgenstein : Meaning and Mind,Vol.3 of an Analytical Commentary on the Philosophical Investigations, Part I :Essays*(Blackwell,1993),pp.247- 248.)。(これと同じ解釈はHans-Johann Glock,*A Wittgenstein Dictionary*(Blackwell,1996), p.93. にも見られる。)ハッカーの解釈は、次の三つの点で誤っている。

①彼はPB §225を見落としているか、注意を払っていない。

②彼の上述の解釈の根拠は唯一 M pp.266-267にある。訳出すると「「歩道がぬれている」は「雨が降った」という命題を検証し得るが、しかし「それは「雨が降った」の文法についてほとんど何も与えない」と彼〔ウィトゲンシュタイン〕は言う。彼は続けて「検証が命題の意味を決めるのはそれが当の命題の文法を与える場合に限る」と言った。そして「命題の検証を与えることはどの程度その命題についての文法的な言明になるのか」という問いに答えて、「雨が降るとき歩道がぬれる」は全く文法的な言明でないのに対し、われわれが「歩道がぬれている」という事実は雨が降ったことの徴候である」と言えば、この言明は「文法に関することがらa matter of grammar」である、とやった。」ところでこのムーアの記録は1932-33年のウィトゲンシュタインの講義のノートであるから、すでに現象と徴候の区別が規準と徴候の区別にとって代わった後の時期のものである(cf.AWL Part I)。ハッカーは、規準的關係が文法的であるのに対し徴候が経験的帰納的証拠であると考えるのだから(Hacker,op.cit.,p.249)、上述の彼の解釈は自己論駁している。

③もし上のムーアの記録の中の最後の文が、徴候が文法的なものであるということをも主張しているとするなら、それは前の二つの文が述べていることと矛盾している。より整合的な解釈を模索するなら次のようになる。ムーアの記録では「歩道がぬれている」という事実は雨が降ったことの徴候である」という言明が、文法的言明であるとは言われておらず「文法に関することがら」であると言われている。つまり、「徴候である」とは「規準ではない」ということであり、それはあくまでネガティブな意味で文法に関わっていることになろう。(なお、同じ

時期のウィトゲンシュタインの講義のアンブローズの記録ではこうなっている。

「命題の検証を与えることはどの程度その命題についての文法的な言明になるのか。その言明が文法的であるかぎり、それは命題の語の意味を説明し得る。それが、徴候を名指すときのように経験に関することからであるかぎり、その意味は説明されない。」(AWL p.31) アンブローズの記録がウィトゲンシュタインの他の著作での主張と整合的であるのに対して、ムーアの記録は(少なくともこの部分に関するかぎり)混乱しておりミスリーディングである。私見ではムーアの記録は第一級の資料ではなく、今の問題に関して解釈の証拠として採用するべきではないと思われる。

- (5) ウィトゲンシュタインの現象学的言語については、拙論「「自我」と「感覚与件」(下)——中期ウィトゲンシュタインのテキストを中心として——」(神戸大学哲学懇話会『愛知』第10号、1994年)を参照されたい。
- (6) ウィトゲンシュタインの現象学については、Herbert Spiegelberg, “The Puzzle of Ludwig Wittgenstein's *Phänomenologie*”, *American Philosophical Quarterly*, Vol.5(1968), 244-256 を参照のこと。
- (7) ラッセルの見解については次を参照のこと。 Bertrand Russell, *The Analysis of Mind* (George Allen and Unwin, 1921)chs. I, III, XII

[哲学 博士課程]

Wittgenstein on the Formation of Criteria Concept

— Toward ‘Distinction between grammar and fact’ —

Akira HAJI

In this paper, the author tries to bring the process of Wittgenstein’s forming criteria concept to light, by the investigation of the development of verificationism, to which the picture theory of language came, in the Middle Wittgenstein.

Thereby, first, the new overview concerning the characteristics of this concept opens. Wittgenstein’s principle of verification that the meaning of a proposition is its method of verification led to the distinction between propositions and hypotheses. Further, the difference in what verifies a proposition and is immediately given led to the distinction between phenomena and symptoms. Phenomena have a grammatical relation to propositions and the former verify the latter. And symptoms, as evidences, prove hypotheses empirically and inductively. Afterwards, the distinction between phenomena and symptoms changed to that between criteria and symptoms by the analysis of intentionality. This change is one from immediate experiences to verbal expressions. As a consequence of the establishment of the autonomy of language, the idea of family resemblance is introduced. Thus, a situation appropriate for a family resemblance concept is regulated by criteria. They cannot be said, but are known implicitly.

Second, the distinction between grammar and fact, that is, the premise of Wittgenstein’s thought, which is not necessarily clear, is brought out in fuller relief. The distinction between factual and grammatical investigations is made methodically. The distinction between grammar and fact is situation-dependent and relative.